

人間の使命

2015.8.21 遠藤清賢

1. 生命の誕生

人間はなぜこの世に生まれてきたのでしょうか。神が創造されたからだとかキリスト教の信徒は答えるでしょう。科学者は地球環境の中でたんぱく質を主とする有機物が水の中で様々な偶然のもとに出会い、結合し、集合して自らの力で動きだし、さらに集合と分裂を繰り返し生物が誕生したと言います。そのタンパク質、そして水はどこから来たのかは未だ解明されてはいません。他の天体から来たとか、星の爆発によって宇宙に投げ出されたタンパク質の成分や水素とか酸素が彗星や宇宙のちりとなってこの地球上に到達したという説もあります。マグマなどの火山活動、また雷などの熱や高電圧等により無機物の集合が化学変化し、水やたんぱく質になったという説もあります。地上の最初の命はどこから来たのかはわかりません。長い時間を経てタンパク質の集合体である有機物が、水の中で生物となって誕生しことは理解されています。

地球が誕生したのは今から 54 億年前と言われています。その後、長い熱球の時代があり、熱が冷え、雨が降り、水が地表を覆い始めて、生物が誕生し、活動しはじめました。そして先カンブリア紀、古生代、中生代、新生代の氷河期を経て今の人類が誕生しました。人類が自分自身を人間として認識できるようになったのは今から 10 万年前頃のアフリカであると言われています。

2. 人間の本能

人間は自立歩行を始めたあたりはおそらく、生きているということは食べることで生存することが生きることであったと思います。食べるために生きて、生きるために食べていました。そして安定的に食べることができれば満足できていたのだと思います。最初の生命体は微生物で雌雄一体自己分裂によって増殖していました。バクテリアから様々な生物が分化し、菌類や地衣類、植物、節足動物、脊椎動物が誕生し、雌と雄が別々の個体として生存するようになりました。そして類人猿が誕生しました。食べること、眠ること、雄であれば子孫を増やすこと、雌であれば自分の子どもの命を守ることが人という生き物の本能でした。今の私たちもこれは変わってはいません。そして雄は安定的に食物を得るために毎日を過ごし、雌も同様でしたが、子どもを産むためには力の強い雄によって食べ物を分け与えてもらう必要がありました。そのために雌はその種の保存のため、同時にその雄のために新しい命を誕生させました。一人で生活するより、二人の生活、そして集団で生活する方がより安定的に食料を確保できることを学習し、人の群れが形成されました。より効率的に食べ物を獲得するために集団での決まりや、その生活の中で言葉の伝達が発達し、快適さとか不快さという思いや感覚、喜びや悲しみの感情も発達したのだと思います。生き物としての感覚をさらに磨き、その感覚で得た情報をどのように出力するのかが大きく変化したのだと思います。自立歩行を始めたこ

ろの行動の出力は、食べ物を獲得することがそのすべてでしたが、集団生活と集団行動によって、他者との関係性に於いて劇的に精神が発達し感情的な表現ができるようになったと思います。と同時に自分という生き物は自分は人間であると自覚できるようにもなったのだと思います。相手の心を考え、予測し、どう行動すれば、その結果がどのようになるのかを想像しながら行動することができるようになったのだと思います。

他者の心が想像できるようになり、自分の思いや、現実世界に於いて自分の想像力を超えた出来事を体験しながら、また命の誕生と死を体験することによって人間は神という存在を意識できるようになってきました。神を意識するという事は高度な精神構造の上に構築された高度な情報処理能力を持っていなければ意識できないと私は思います。神を意識して初めて人は人間になることができたのだと考えることができると思います。自分たちが存在するために自分たちを創造した絶対的な存在であり、その存在が自分の生き方の全ての規範になるという思考力と行動力を獲得出来て人間は宇宙を意識し、自分の本能を制御し、自分たちの生き方をどうあるべきかを考え、祈り、自分が進みたいという目的、進むべき方向や信念を持ち、それに向かって努力し工夫できるようになったのです。この能力を持ちえたのは神を意識できるようになったからだとは考えています。

人間の生命力が最大に高まったのは、縄文前期、旧約聖書の創世記の時代ではなかったのでしょうか。旧約聖書の時代のモーゼに神様が十戒を示されたころが、人間のピークであったように思えます。日本では山内丸山に集落を形成していた縄文の時代であったと思うのです。その頃の人たちは他者を思いやる心、命を大切に、家族を大切にすることは現代人と何ら変わりがないように思えます。むしろ単純明快さに於いては現代人よりを生きることに於いて、優れた精神と能力を兼ね備えていたように思えるのです。彼らは厳しい環境の中で生活していましたが、けっして不幸ではなかったように思います。生まれた命を大切に、食物を獲得できたことに感謝し、食することを喜び、飛び走り、出会い、協力することを喜んでいました。自然の循環の中に自らの命を組み込み、その中で足りることに満足していたと思うのです。彼らの優れた想像力と生命力は、神様を意識することができ、祈りによって客観的に自己を見つめ直し、神と出会うことができたのだと思います。古代の人々がそのように生きなければ聖書は書かれることはなかったし、仏典も書かれることが無かったと思います。クリスチャンとして述べるならば神は人を人間として下さり、イエスキリストを通してその存在を私たちに明らかにしたのだと考えて良いと思います。

3. 今の人たちは幸せなのか

今の日本に住んでいる私たちは幸せなのでしょう。生活環境はこれ以上ないほどに快適になっています。食べ物は何も心配することなく手に入れることができます。しか

し、何のために生きるのかを私たちは見失っているように思うのです。生きていることを望んでいない人たちが多く存在しているように思います。命を最上のものと捉えられないのは生きることに何も意味を見つけられず、ほとんどの人たちがただ漫然と時を過ごしているだけのようです。自分の命を躍動させ、生きようとする本能を逆に押し返してしまふ得体の知れないものが私たちの社会にあるのかもしれませんが。得体のしれない物ではなく私たち自身が無意識にこのような環境を拵（こしら）えてしまったのかもしれませんが。人間の体の中でも変化が見られているようです。命を継承させるために備わっている機能が変化しているという報告があります。男性の精子の数が極めて急激に、短い時間で減少しているのだそうです。このままでは、人間は終焉の道を辿る以外にないのかもしれませんが。この原因は自らを生かそうとする力、意志が弱体しているからだと言われていました。人間は生きる意欲を失いかけていると同時に命を繋げるといふ本能が喪失しているのかもしれないと報告されています。自己の命の延命は努力するが、新しい命の誕生を望まなくなっているのではないかということなのです。人間自体の基本的な本能が変化してしまっているのかもしれませんが。私たちは神を信仰することによって人間としての能力を高め、その正しい行動ができるように自己制御してきたのだと思います。現代人はその神を忘れ、自分を人間ではなく神を意識できない生き物に退化させてしまったように思うのです。人間を人間としてあるべき存在に高めるためには、神を信仰し神を知ることによってしか成し得ないのです。ですから今の状況では、人間は退化の道を歩んでいるとしか思えないのです。このままでは人間は、自分の命のためにしか生きることのできない利己的なただの動物になってしまうのです。

4. 快であれば良いのか

人間にとって命は最上のものであることは変わりがないのですが、これは自分自身の命であり極めて利己的な思いとしてそれぞれの個人を支配しているのだと思います。従って、自分の命と他者の命を比べると当然自分の命の方が自分にとっては大切な命であると考えます。そして生きるとはいつでも心地良くありたいと願ひ、そのように生きようと誰もが工夫しそのようにありたいと努力します。心地良く安定的に食物を得ること、生きる環境は適度な気温の中で過ごすこと。そして自分を支える伴侶がいること、新しいこと、豊富であること、自分の思い通りになること、自分の嗜好に合っていること、等、自分の欲望を満足させることが、心地よさになっています。人間の欲望と比例し、いわゆる文明も発達しました。文明の原動力の大半は人間の心地よさを追求した欲望の結果でした。この心地よさは人間の精神を高めることはできなかったように思います。心地よさは欲望に変化し、それは自分だけがという利己的な欲望を強めてしまいました。そして、多くの人間は自分の欲望の限界を見極めることができなくなってしまいました。欲望は制限なく高められ、利己的な生き方しかできなくなって来たのです。その集団が国家となり、国家間の利害関係や持てる者と持っていない者との格差が生じ、

争いが生まれ、戦争になってしまいました。現代の戦争は国家間の利害関係や原理主義的な宗教戦争のようですが、その根底には貧困による格差の拡大が争いの原因になっています。膨大な力を得た個人や特定の強い国家が資産を蓄積し、その財産を社会に還元していないことも大きな原因になっているのだと思います。一部の特権階級が社会全体を動かし、富を我が物にしまう不条理に耐えられず争いが起きているのです。そして誰でも特権階級になろうとして戦争をしているのです。人間はこの利己的な欲望を制御できなければ争いは終息することは出来ないでしょう。蓄積された財産を再分配し、生きることの恵みをお互いに支え合い、心を通わせる精神を持たない限り人間の命の継続は出来ないと考えます。命を利己的なものとして捉えるのではなく、自分自身を生かしている他者の命を自分の命と同等に意識できなければ人間の未来は無いということなのだと思います。

5. 生きることの使命は何なのか

私たちはどうしてこの世に生かされているのか、私達は命を誕生させること、その命を支え、守ることが、私たちがこの世に生れた使命なのです。神はそのことを私たちに伝えてくれます。現代人は他者の命を支えなければならないという考えを持っていません。自分の命は最上ですが、それ以外の命はどうあっても良いと考えている方が多いのではないのでしょうか。世界全体の人たちは自分を生かすことに精一杯の状況なのかもしれません。この傾向はますます強くなるような気がします。

人間として生きるためにどうあるべきなのか神様から与えられた規範を私たちは確認しなければなりません。多くの人たちはその規範を忘れてしまいました。全く知らない人が大多数です。自分の命、他者の命、それぞれの命、全ての命が連携し自分自身を生かしていることを私たちは確認しなければならないのです。そして人を人間として下さった神を多くの人たちに伝えることがクリスチャンとしての使命であるのです。